# 會員通信

## チノミシリ・ルイカ

大山　明

チノミシリ・ルイカが死んだ。この年の秋も深まった頃である。彼女の死を知っている人はまだ少ない。チノミシリ・ルイカが死んで、その名だけが残った。霎まじりの風の向うの〝鉄とコンクリートの墓〟に。墓を見下す夕暮れの森には、アカゲラのたたく、葬送のドラムが鳴り響く。チカプニ（近文山＝鳥来る所の意）から夏鳥たちが去り、オサルペツ（オサラッペ川＝葦原のある川の意）を渡る風だけが吹き荒れる。チノミシリ・ルイカは死んだ。

＊

函館本線の列車がカムイ山地の最後のトンネルを抜けると、左手に小さな川が見えてくる。石狩川の小支流オサラッペ川である。この川の西側一帯は自然休養林で、俗に「嵐山公園」と呼ばれている。規模は小さいが、北部温帯林の要素が良く保存されている森林で、この一画に北邦野草園がある。ハルニレ・オオバボダイジュ・カツラ・ミズナラなどの高木が空を覆い、林床には、カタクリ・エゾエンゴサク・オクエゾサイシン・シダ類など、この地方の自生種が豊富である。自生種の群落はほぼ原生的に保護されている。園長の吉田友吉氏は高い見識と深い愛情で野草園を管理し、訪れる人々は深い感動を得て帰っていく。

人々はオサラッペ川にかかる木の吊橋を渡ってこの森に入る。吊橋の支柱には、確か十人以上は危険という内容の注意書きがあった。しかし、それ以上の人が渡ることは珍しくない。警告をユーモラスな意味に解しているせいかも知れない。あるいは、橋を渡りながら眼の前に巨人のように立ちはだかる弓成山の森に畏敬の念を感じて、「心の準備」（吉田先生の言葉）をするのかも知れない。車から下りて吊橋を渡るわずかな時間が、人々にある心の変位をもたらす、とわたしも思う。これから自分が何をしようとしているかを意識する、ささやかな心のゆとり（点検）を失いがちな日常のなかで、このようなことはとても貴重に思えるのである。

この夏、すぐ下流に永久橋が造られ、吊橋は取り壊されることになった。聞くところによると、大水のとき、橋の流失の危険を避けるため開発局（旭川開発建設部）が計画し、着工したという。鉄・コンクリート製の永久橋は、大型車輌も通行可能な構造で〝立派な〟橋である。橋の工事にともなって、周辺は一変した。河川敷は刻ぎ取られ、樹木はことごとく伐り倒された。そのなかには、この森に数少ないウワミズザクラもあった。後には、例によって灰色のコンクリート・ブロックが敷きつめられ、景観は見るかげもなく変った。この工事に気づいたとき、永久橋は半ばでき上がっていた。無念であった。

チノミシリ・ルイカが死んだ。彼女の名は〝墓〟にのみ残った、と書いた。「心の準備」を教えた吊橋は取り壊されたからである。チノミシリ・ルイカとはこの橋の名で、「我らが祭る山の橋」を意味する。それは、はるかな昔、自然史とともに生きてきた、この地の人々にとって、「我らが祭る山」に登るときに渡る〝聖なる橋〟であったと思う。生活のなかでは具象の、地理的には固有の自然認識的には優れて抽象化（普遍化）された存在であったと思う。

いま、オサラッペ川には葦原（Sar）の姿はない。水鳥の姿も少ない。一九七五年十二月、この川のウグイから高濃度の水銀（新潟大鈴木哲氏分析総水銀最高 1.956ppm）が検出され、道は慌てて、食用禁止の立札を立てたことを忘れることはできない。オサルペツはすでに死んでいた。いままた、チノミシリ・ルイカが死んだ。殺されたとさえ言いたい。それを感傷だ、と非難する人がいるかも知れない。あるいは、〝立派な〟永久橋ができてなぜ悪いか、と反論する人がいるかも知れない。

＊

わたしの平凡な意見を短く言おう。新しい橋がぜひとも必要なら、なぜ下流部の既設の永久橋の改修を試みなかったか。永久橋の新設が必要だったと仮定しても、なぜ人々が親しみ、大切にしてきたチノミシリ・ルイカを壊さなければならなかったのだろう。そのことの論拠を明らかにする道義的責任を問題にしたい。わたしの恐れは、この意味深い吊橋の喪失が、チノミシリ・ルイカに象徴される自然と人間のかかわりの、かけがえのない歴史を失なっていくことにつながるのではないかという不安である。

（旭川南高等学校教諭）

# 政党化した西ドイツの自然保護運動

## ―留学生活からの一レポート―

中野徹三

十月一日より一年間、海外研修の機会を与えられ、西ドイツ・ハイデルベルク大学で新しい研究生活に入っております。当地方では先月の十一月十二日に、初雪が降りましたが、いまは樹々もすっかり葉をふり落として冬の装いをととのえております。

ここはたしかに、ゲーテやヘルダーリンらを嘆賞させた美しい街で、古城などの史跡と市民生活、自然美と人工美とが見事な調和をみせておりますが、あまりにも観光地化されてしまい、すれからしてしまったという印象は拭えません。老人たちは皆、「昔はもっと美しかった」と申します。

さて、この機会に自然保護協会の一会員としての自覚をとりもどし、最近の西ドイツで大きな話題になっている、「緑の党」Die "Grüne" について、新聞報道をもとにしながら、ご報告したいと思います。日本での総選挙の結果を報じた西ドイツ各紙（十月九日号）は同時に、はるかに大きい紙面を割いてブレーメンのラント議会選挙（十月七日）の結果を報じました。この結果は、来年秋に予定されている西ドイツ総選挙（下院選挙）を占うものとして与野党から注目されていたのですが、結果は次のとおりで、やはり社会民主党の勝利に終りました。

**ブレーメンの邦議会**

**得　票　率**

| | 1975年 | 1979年 |
|---|---|---|
| 社会民主党（SPD） | 48.8%（52） | 49.4%（52） |
| キリスト教民主同盟（CDU） | 33.8（35） | 31.9（33） |
| 自主民主党（FDP） | 13.0（13） | 10.8（11） |
| 緑の党（Die "Grüne"） | 0 | 5.1（4） |

（　）は議席数

しかしこの選挙結果が注目されたのは、既成各政党の消長よりも「緑の党」とよばれる自然保護団体が選挙史上、はじめてラントの議席を獲得したということでした。

西ドイツでは選挙に、いわゆる「五％条項」というのがあり、その選挙区の有効投票数の五％以上を獲得した党派だけが、比例代表制にもとづく議席の配分にあずかることができるのですが、この「グリューネ」は、五・一％をとることによって、ついにこの壁を破ったのです。

二議席ずつを失ったCDU、FDPのショックは当然大きいわけですが、単独政権維持に成功したSPDの幹部も「緑の党」の当選を重要視し、今後は、SPDこそが自然の生活条件の保護を考える政治的故郷なのだ、ということを、選挙人に十分確信をもたせねばならないと語っています。

この「緑の党」が成功した諸条件といえば、ひとつは今回の低い投票率（七八・四九％、一九七二年は九一％、七六年は九〇％）にありますが、やはり若い層の支持率の高さによるところが大きいとされています。「三十才以下の選挙人に占める〝緑の党〟の得票率は、全選挙人の中での同比率のほぼ倍に達する」（「世界」紙）。したがってCDU、FDP支持者からばかりでなく、青年層の支持率が高いSPDの支持者からも、「緑の党」に動いた部分が相当あったとみてよいでしょう。

そして、この党の指導者であると目されているオラーフ・ディネ（四四才）自身、長い間ブレーメンのSPDの積極的な活動家だったといわれています。さらにこの背景には、来年の総選挙の最大の争点（与野党間のみならず、与野党内部でも）のひとつになっている、石油に代るエネルギー源としての原子力発電所是否という大問題があることもみのがせません。

「緑の党」の代表者は、もちろん核エネルギー依存政策に反対であり、SPDの原発反対派にたいしても、「成長イデオロギー」（経済成長第一主義）を放棄しない限り、信用できないと批判していました。この党の具体的な政策はまだはっきりしていませんが、同党は来年早々（一月十二、三日）に、全ドイツ規模の政党を結成する大会を開くことを十一月のオッフェンバッハの代表者会議できめました。これによって同党は、来年秋の西ドイツ総選挙にも全連邦的政党として参加する姿勢をはっきりさせたわけです。

「緑の党」は、やはりSPDが強い北部ドイツがその支持基盤ですが、最近、この党のバイエルンの幹部会は政府と自治体に対し、一九八八年の冬季オリンピックから手を引くよう要求を提出しました。総書記ラインホルトカップによれば、冬季オリンピックはすでにずっと以前からスポーツ競技たることをやめており、むしろ、「スポーツ用品の販売見本市の新しい形態になっている」、「この馬鹿さわぎに最終的結着をつけ、学校スポーツにもっと金を出すべきである」と結論しているほどです。

おとぎ話の国ブレーメンに始まった自然保護運動のこの政党化は、日本の私たちにもいろいろと考えさせられる問題を提起しているように思われます。

（一九七九年十二月二日、札幌商科大学）

# 植林

橋場文俊

約三週間にわたる西域の旅を終って、たいへんに強い印象を残しているものの一つに、中国の植林事業がある。

南船北馬といわれた中国大陸では、南方の熱帯地方に入るほどの南部では、もちろん木が多い。私たちが戦前、中国にいた人たちからの話では、北部中国は木が多かったということはあまり、聞くことがなかった。私たちが訪ねた西域は砂漠地帯であった。ウルチチからトルファンまでいったがこのトルファンという町は、豊富な地下水をくみあげて、全長千三百キロに及ぶ膨大な植林をなして、オアシスを形づくっている。この植林によって、夏の四十度をこえる熱風をさえぎり、流砂（この地帯の流砂は町全部をうずめてしまうほど激しい）をくいとめて、豊かな農作物を生産しているのである。私たちはこの町を走るたびに、並木のトンネルをあちこちで通過した。そして、そのたいへんな努力と知恵に感銘した。

全国いたるところ、この植林は国家の政策として、年に数百万本を植えている、という。北京の空港から北京に通じる約二十キロの道も、黄葉した並木路のトンネルだった。西安の郊外を走ったときも、どこまでもその並木道は続いていた。すばらしい仕事が確実に進められていることに、私たちは感心したものであった。

わが国の植林事業は、全く民間にまかせられているといっても、過言ではないだろう。林野庁は、一方的に木を切ることに熱心で、その年度の生産性のみを考えた対策しか考えていないようだ。おそらくあと百年もしないうちに、日本人は木の家に住めなくなるのではないか。

このような大切な植林事業は、国家が政策的におし進めるべきだろう。一度植えた木が成長するまでには長い歳月を必要とするのであることを思えば、その政策は極めて急を要する。国民運動は、民間の「みどりの羽根」だけというのも大いに批判されるべきだろう。

また、北海道における植林事業は、最近は針葉樹がたいへんにふえてきている。針葉樹だけでは土地が徐々にやせてくることを考えれば、もっと広葉樹を植るべきではないか。すべてが生産性のみにしか考え及ばないところに官僚の思考の貧弱さと、現在の経済のしくみのゆがみがあるように思う。政府はともかくとして、堂垣内さん、板垣さん、もっと街路樹をふやす努力をしませんか。

日本の最近の異常気象も、風雨による災害も、都会における地盤沈下も、その大きな原因のひとつは木が少なくなったからではないでしょうか。私は、木を植えることの大切さを、この旅ほど教えられたことはありません。

宮民ともども、もっと私たちの国にみどりを、と私はいいたい。それが、私たちが自然を守っていく第一歩だと思うのです。

（喜茂別厚生病院長）

# 「チカルカルペの会」のアイヌ文様刺繍展を見て

八木健三

最近、三菱ショウルームで開かれたアイヌ刺繍展を見たが、なかなか面白かったので、ちょっと感想をのべてみたい。チカルカルペとは「われわれのつくったもの」というアイヌ語だそうで、アイヌ文様（もんよう）を二〇余年取組んで来た三上マリ子女史の主宰する、アイヌ刺繍を学ぶ会の名になっている。この展覧会は第一回の作品展だそうだ。

会場に入って最初に目に入ったのは、アイヌ祭りの男の晴れ着だった。濃紺の地に八つの大きな渦巻が並んでいるのは、まことに豪快なものである。そのほか、テーブルクロスにも壁掛にもこの渦巻模様が目についた。会場に来ておられた指導者の三上さんのお話では、「この渦巻はアイヌの護り神の目なのです。これがグッと悪者を睨みつける。沢山あるトゲは、悪者をギュッと掴える鋭い爪なのです。こうして、アイヌ文様はこれを身に着ける人の安全を守ってくれるのです。」という。

「このように着る人の身の安全を祈りながらつくったアイヌの人びとの心を理解したうえで、その文様を忠実に再現してゆきたいと考えております。単に美しい刺繍をつくるだけではなくて……。」

アイヌの人類学研究に大きな足跡を残された故児玉作左衛門教授の下で、多年研鑽をつづけただけあって、その視座がしっかりとしているのに共鳴を覚えた。

また、会場には見事な白髯をなびかせた白老酋長の宮本エカシマトクさんの姿もあった。三上さんが真にアイヌ精神を理解し古来の手法を継承してゆくことに、平素から深く感謝していて、今日も白老から駆けつけたということだった。宮本さんは「シナノキやオヒョウの皮を川に浸し、薄い繊維の片をほぐし、これから編んだ布地に、

キツネの脚の骨でつくった針で刺繍をしたものです……。」と説明してくれた。鉄の針などは、部落に一つしかない貴重品で、皆が交互に使ったもので、折りでもしようものなら皆が屋外に出て泣いたという。

アイヌ文様には、門外漢の私が見てもハッと思うような近代的感覚にとんだものがあることに、驚きを禁じ得なかった。これは日本古来の刺繍とは全く別の、しかももっと高度な技術であるという。上すべりした観光的な造形ではなく、アイヌ精神まで理解したうえでアイヌ文様刺繍を再現し、その技術を後に伝えるのは、たいへん重要なことだと思われる。

だいぶ昔になるけれど、犬飼先生のご紹介で萱野　茂氏のアイヌ彫りの盆を手に入れ、クルミぶきんでつやを出し大切に使っている。いつか萱野氏にその話をしたところ、「私の彫ったお盆を大切に使って下さる方に会えて嬉しい」と、アイヌ語をカナでその著書にサインして下さったことがある。その萱野氏が最近、青年たちに古来のアイヌ彫りの技術を教えているということを伺って、たいへん喜ばしいことと思う。

メルボルンにはボランタリーの婦人団体がオーストラリア原住民「アボリジン」が昔と同じ方法でつくっている民芸作品を売る店を経営し、その売上げのすべてをアボリジンの生活費にしている。またワシントンでは十数年前、地質調査所のあった内務省の建物の一隅に、アメリカインディアンがつくった銀やトルコ石細工を適正価格で販売する政府直営の店があった。いまもやはり、その店は開かれている。

このように先住民族が残していった民芸を護り、それを純正な形で継承してゆくことは、たいへん大切なことである。そして根底においては、自然保護の精神、とくに原始自然の保護と相通ずるところが大きいと思う。ともにかけがえのない貴重なものを、次の世代に伝えてゆこうと努めるところが共通した点であろう。

（北星学園大学教授）

## 釧路湿原

札木照一郎

昨年末に、国連の国立公園関係の人と釧路湿原と阿寒国立公園の中をひとまわりしたが、国立公園の中における開発などの日本の考え方については、毎度のことながら相手に理解させるのに苦労する。また、二月には鳥類の国際シンポジウムが開催されるので、その準備のために、年初めに国際ツル財団から二人の来訪をうけ、五日間も湿原をともにまわり、着実に進捗をみせている開発の様子をみてきた。ラムサール条約が国会を通っても、国内法には無関係だといいながら、この急ぎぶりには目をみはるものがある。

イランの北、カスピ海岸のラムサールでの会議の結論は、参会の学者にも報導関係者にも日本人が一人もいなかったため、私がそれを知ったのは約三カ月おくれの英国の雑誌からであり、いち早く日本語で私が報告してからでも十年の才月が流れた。その間、私がもっとも急いで考えねばならないと思ったことは、一日も早く釧路湿原が日本における「渡り鳥」にとっての大切な場所として、日本人に認められねばならないということであった。

現在、全国に九カ所の一級鳥類観測ステーションにしても、二十一カ所の二級ステーションにしても、まだその中には釧路湿原が含まれていない。また、環境保全資料総覧（環境庁内環境情報研究編）の三一〇五―六頁、第一法規（昭和四十八年初版以後挿換え方式）の最新版にも、「主要な渡り鳥の渡来地の現況」にある全国三十七カ所の中にも釧路湿原はみいだせない。これは、われわれ全員が力を合わせて多くの人達に知っていただくべきことだと思う。

一方、釧路湿原の天然記念物指定区域の拡大運動は、関係町村の静かな動静に圧力を感ぜざるをえない現況である。地元教育局が開催するそれらの会合には参集する関係者はすくなく、湿原（国有地）の払い下げについての関心だけは町村においてきわめて強いものがあり、各町村の保有する湿原の乾拓は実にみるべきものがある現状である。

釧路支庁と釧路教育局との関係職員で構成される「釧路湿原プロジェクトチーム」は、一月二十五日に第一回検討会を催し、十月を目標として支庁長への答申作製の緒についた。開発局は、洪水時の湿原ダム化構想の工事に着手し、以前にきめられた「海岸線から五粁以内を出ない湿原内の構築物設置を認めないこと」（釧路地方総合開発促進期成会）という大原則も、市の大規模運動公園構想により、いつのまにかほごになっている。

湿原はその周辺を含めて自然のままに放置されても、長期間に遷移をおこしつづけることは言をまたない。ましてや周辺、さらには内部における人工的な変化は、自然的な変化をはるかに越えた速度でその終末を招来せしめる。絶大な信念をもって人工的な変化に相対する人もあるだろうが、狭い国土での商売としての開発は心情的にも

論理的にも弱い背景しかもたない日本人の自然観と、さらに弱い（先進国は比較にもならない）法律的な基盤もまったくおかまいなしに、徹底的な成果をあげるであろうことは明らかである。ただ現存している湿原についての記載と考察とは大いになさるべきである。その点まったく新しい分野を含んで、多方面からの調査を行っている釧路市立博物館を中心とした幾多の仕事は、より広く多く人達に励ましを与えている。

二十年来、われわれが論じつづけてきた湿原研究所の設置は、まだ遠い将来のこととしてもラムサール条約が目前の問題としてあるとき、鳥類観測ステーションの設置や、渡り鳥がくる場所としての認知などを改めて考えてみたいと思う。観測ステーションの位置の問題は、「ラムサール条約登録予定湿地鳥類など生息調査報告書」（昭和五十三、三、北海道）の六一～七一頁、正富宏之博士の記載が大いに参考になる。

（釧路・札木医院院長）

## 「自然と文化」について

原田輝治

このところ、連日のように小樽運河の再開発問題が報道され、その成り行きが注目されています。私自身、小樽市のはずれの銭函で育ち、一応、小樽市民の一人であったということもあり、どう結論が出るのか少なからぬ関心を持っています。

こうした記事に眼を通しながら、いつも感じるのは、美しい自然を残したいという気持と、歴史的町並みなどの文化的遺産を残そうという心情は、本質的には全く同じではないかということです。しかし現実を見ると、自然の保護と文化財あるいは歴史的環境の保護とは、あまりにも大きな距離感を持って、把えられているように思えます。

イギリスのナショナルトラストは自然保護地の買収などのユニークな活動で、その存在は自然保護関係者にも広く知られていますが、同時に、歴史的環境の保護の面でも多大な功績を残しています。むしろ、歴史的環境の保護が自然保護の先導的役割を果したと言って良いでしょう。それは、日本においても決して例外ではありませんでした。自然は文化財価値においてその調査が進められたのです。その後、自然保護が生態学という大きな力を得て、イキモノの自然を扱うものとして独立するにいたった経緯があります。また、歴史的環境を問題にするにあたっては、より人間的に、まさにいまその場に生きている人間を含め、その環境をいかに保存し、再創造するかが問われる状況にあるように思われます。

前置きが長くなりましたが私がここで紹介したいのは、「日本ナショナルトラスト」の会報についてです。その団体が具体的にどのような活動をしているか、その詳細は分かりませんが、その会報は一読の価値は十分あるといえましょう。

会報は月刊の「報」と季刊の「自然と文化」の二種類があり、「報」が約一〇ページ、「自然と文化」が約六五ページで構成されています。

「報」は、活動記録とともに、各地からの調査レポートなどで埋められています。いきおい文化財関連の記事が多くなっていますが、昨年の自然保護関係分では、巻機山の自然復元記録に最も興味が持たれました。登山者の増加による登山道からの土砂流入で埋まってしまった池塘を、会員などのボランティアで景観修復した記録で、今後の自然保護のあり様を示すひとつとして強く印象に残っています。

「自然と文化」は毎号特集を組み、そのいずれもが高いレベルの内容といえましょう。特集は「町並みの息吹きをたずねて」、「郷土芸能」、「蝦夷地北海道」、「滅びゆく野鳥」などバラエティに富んでいます。

なかでも、五十二年の秋季号「日本の石造文化」特集は、読みものとしても興味深いものがありました。幾内地方の石棺を石材から調査した結果、九州など遠方から運ばれたとする「運ばれた石棺」、江戸時代からの未曽有の大水害に耐えてきた石橋の構造と、その芸術性を語る「九州の石橋」、その他「小樽の石造建築」、「石の文化と日本人」など、全般を通して編集者の思想や哲学を感じさせるものでした。

また、「町並みの息吹きをたずねて」特集のなかで、「歴史的町並みの今日的意味」として、現在の倉敷や妻籠が現代人のイメージで再創造したものであることを明らかにし、イキモノである町並みを保存する意味とは、文化的再創造の優秀さにほかならないとし、それが文化がつねにイキモノとして生き続けるゆえんであるとする小論文は、明解であるとともに、この問題が自然保護論と極めて近い位置にあることを教えられたものでもありました。

ここに一、二の事例を示しましたが、毎号〝何か〟を得られる会報として、楽しく読ませていただいています。これらの会報は、すでに読まれている方も多いと思いますが、自然保護と文化財保護の接点になるものとして、あえてここに紹介する次第です。

（北海道生活環境部自然保護課）